

ことばとリズムと身体と 演劇体験ワークショップ&朗読会報告

柴田隆子

公益財団法人静岡県舞台芸術センター(Shizuoka Performing Arts Center:SPAC)に所属する俳優・演出家による演劇体験ワークショップと朗読会が、2022度に引き続き、今年度も異文化コミュニケーション学科主催で行われた。このワークショップと朗読会は、他者と向き合い「ことば」を相手に届けるためには、ことばや声や身体にいかを意識的であるかを実践的に考え、体験する目的で企画している。今年度は開催時期を学期期間中とし、第1回と第2回は前期に、第3回と第4回を後期の始めにずらして設定した。開催日とその概要は以下の通りである。

第1回ワークショップ(6月18日)

1号館15Fホール

ことばと身体 音楽編(三部構成)

第2回ワークショップ(7月2日)

10号館16F相馬永胤記念ホール

ことばと身体 脚本・テキスト編(三部構成)

第3回朗読劇鑑賞とワークショップ(9月23日)

10号館16F相馬永胤記念ホール

SPAC出張劇場『犬を連れた奥さん』

構成・演出:牧山祐大

出演:石井萌水、榊原有美、佐藤拓之

第4回ワークショップ(9月24日)

10号館16F相馬永胤記念ホール

ことばと身体 脚本・テキスト編(三部構成)

毎回のワークショップでは、講師としてSPACの俳優・演出家である牧山祐大氏が、SPAC所属の俳優陣と共に指導を行なった。参加者の名前を覚える「名前回し」や身体の感覚を開く「指広げ」などの準備運動を兼ねた基礎訓練を毎回行くと共

に、各回のワークショップの内容は創作エチュードのようなものから実際に戯曲を読んでものやりとりなど多岐に及んだ。なお、第1回では棚川寛子氏による音や音楽を用いたワークショップも行われた。棚川氏はSPAC作品の音楽作曲を行う他、劇中で演奏する俳優指導も行い、「アートと日常の有機的な交流を模索」している講師である。ワークショップではトームチャイムやハンドベル、シンギングボウルほか、見たことのない民族楽器がたくさん並べられ、学生らはそれらを用いて音で情景を作ることを体験的に学習した。

演劇ワークショップで音を用いることの意味については、国際交流基金のアーティスト・インタビューで自分の仕事に対する姿勢を語る、棚川氏の言葉を引用しておこう。

2017年にアヴィニョン演劇祭でも上演した『アンティゴネ』では、死を覚悟したアンティゴネが「ディルケーの川の源よ、テーバイの森よ……」と語ります。その時アンティゴネの心にはディルケーの川やテーバイの森が見えていたのではないのでしょうか。アンティゴネが見ているであろうその景色を、想像力によって観客も同時に見ることが出来る。どうすればそれを、音楽で後押しできるか。それを考えるのが私の仕事だと思います^{☆1}。

登場人物たちが見ているであろう世界を、音楽によって観客に想像させる。このことを体感的に理解するために、第1回のワークショップでは、学生らはまず1つないし2つの音を用いて、そのリズムを操作することだけで情景を作ることが求められた。その時に重視されるのは、他者の出す音に対して、自分の出す音のタイミングをいかに合わせるか、あるいは外すかである。即興で行われた演奏では、重ねられる音は時に賑やかに、時に荒々しく、そして最後は自然と収束して誰が合図するともなく終わっていった。これは他者を意識しなければできないことである。音やリズム

を通して、他者の存在を意識することができる貴重な体験となったと言って良いだろう。

音やその残響は空間と密接な関係がある。音はそれを聞く身体にも作用する。コミュニケーションにおけるメッセージのやり取りは、単に語義的な意味の授受に限らない。ドイツ語圏の演劇学では、音、ノイズ、響き、音楽は、知覚する主体を包み、身体に浸透することで、空間の感覚を伝えるだけでなく、生理的または情動的な反応を引き起こすものとして扱われる^{※2}。そして、リズムは「時間を組織し構造化するための主導的な原理^{※3}」であり、「人間の身体は外的な原理としても内的な原理としても知覚できる^{※4}」という。音のリズムは時に呼応し、時に相反する形で、楽器の持つ音色と共に、目で見るとは異なる景色を描き、豊かな空間と時間を生み出すのである。

音がいかに複雑な情景や心情を描くかを体験できる場となったのが、朗読劇『犬を連れて奥さん』である。『犬を連れて奥さん』はロシアの劇作家アントン・チェーホフが1899年に描いた短編小説である。チェーホフは『かもめ』(1896初演)、『ワーニャ伯父さん』(1899初演)、『三人姉妹』(1901初演)などの戯曲が有名であるが、今回行われたのは小説をもとに牧山氏が台本を起こし演出したリーディング公演である。一般にリーディング公演といえば、俳優は多少の動きを伴うものの、ほぼ素舞台上で戯曲や台本のテキストを聞かせる形である。しかし、SPACの朗読劇は舞台こそ素舞台であったが、テキストの言葉だけでなく、その身体の動きや、照明、導入される音や音楽によっても、情景や登場人物の心情が描かれた。内容は静養地で出会った人妻と妻子持ちの男とのW不倫であり、主人公の男の目線で描かれた原作を踏襲したものであったが、鑑賞した学生たちは内容よりもむしろ、そこでのコミュニケーションに関心をもったようであった。

学生が書いた体験レポートから読み取れるのは、場面ごとに描かれるコミュニケーションの象徴性への関心、そこでの声の抑揚や声量、会話のスピード、顔の表情、身体の動きなどの意味に還元され



写真1 朗読劇『犬を連れて奥さん』



写真2 『転校生』を演じる 第4回ワークショップ

ない非言語メッセージの授受への興味である。また登場人物間のコミュニケーションよりも、観客との関係でどのように描かれているのかに関心をもって鑑賞した学生もいた。劇中に挿入された音楽の生演奏の効果が、劇の進行を理解するのに大きく作用した点も指摘されている。小説を読んで内容を理解した上で観劇に臨んだ学生もいたが、ほとんどは朗読会での「上演」から、そこで行われている出来事について考え、さらにそこで得られたものをもとに、自分がどう考えるのかに力点を置いている。昨年の朗読劇、太宰治の『グッド・バイ』も鑑賞した学生からは、恋愛のテーマは感情の揺れ動きが表しやすいから選択されているのかという疑問も呈され、恋愛以外のテーマでの朗読劇はどうなるのか、という感想も寄せられた。1時間程度の小作品ながら、この朗読劇は多くのことを考えさせる機会となったと言えるだろう。

翌日の第4回のワークショップでは、今度は平田オリザの戯曲『転校生』を、学生たち自らがリーディングを行うものであった。セリフのある登場人物を2人の学生がテキストを片手に演じ、その場面に別のメンバー4人がトーンチャイムの音で情景をつける。現代口語演劇である平田オリザの作品



写真3 第4回ワークショップ参加者

は、チェーホフに比べ学生にはより身近に感じられたようである。短い場面ということもあり、意外なほどすんなりと動きながら対話を行うことができていた。面白いことに、どのグループも同じセリフを読むにも関わらず、話す人の姿、声の抑揚、距離感、音やリズムが異なることで、2人の関係性も、起きている出来事もまったく異なって見えてくる。淡い恋愛感情に見えたり、友情の萌芽に見えたり、それぞれのキャラクターもひとりとして同じように見えないのが興味深い。

参加した学生からは以下のような感想が寄せられた。

演技し終わってみると、もう少し声のトーンを上げればよかったとか、顔を上げればよかったとか、もう少し抑揚の付け方を意識してみればよかったなど、こういう風にしてみればよかったという点が自分の中でたくさん出てきて、演技の楽しさを少し知ることができました。自分達以外のグループの演技を見て、全員が同じ役、同じセリフで行われているはずなのに、こんなにも違いが出るのかと思いました。(2年)

昨年のワークショップでは参加者全員で1つの物語を作りましたが、今回はグループに分かれてそれぞれの演技を行い、グループごとに雰囲気や全く違い前回とは違う楽しさがありました。楽器の演奏をつけてみてさらにそれぞれの個性が出ていたと思います。また、23日のワークショップでは出演者、演出の方々へ質問を

して十人十色の答えをいただいたり、24日も名前を覚え合ったりと少人数だからこそのアットホーム感があり参加者と仲を深めることができ、とても楽しかったです。(3年)

他にも、参加して初めて面白さがわかったという学生の意見などがある。身体を通して体験することで理解できることは、決して少なくない。少人数でしかできない企画

ではあるが、頭で理解できることとの違いを、学生自らが体感できる良い機会となったと思う。次回を楽しみにしているという声も聞く。少しずつではあるが、企画の意義を伝えていきたい。



写真4 様々な楽器 第1回ワークショップ

❖1…横堀応彦「宮城聡の劇世界を支える舞台音楽家の棚川寛子」『アーティスト・インタビュー』国際交流基金、2018年2月18日

(https://performingarts.jp/f.go.jp/j/art_interview/1801/1.html)。

❖2…Fischer-Lichte, Erika, *Ästhetik des Performativen*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 2004, S. 207. (=『パフォーミングの美学』論創社、2009年、176頁)。

❖3…Fischer-Lichte, S. 232-233. (=196頁)。

❖4…Fischer-Lichte, S. 98. (=85頁)。